1.「情報通信インフラ整備で開花する新しい農業農村の多面的機能」を読んで考えたこと

私は初めに溝口先生らのロンボク島からジャカルタまでの陸海ウルトラ横断の旅を拝見した。本来なら、飛行機一本で目的地のジャカルタに行けたはずが、噴火によって飛行機が飛ばないため船と車を使う羽目にあったそうだ。計４日間の周りみちを経て、インドネシアの文化に触れ、さらには現地での農業についても学ぶことができたそうだ。写真や　X（旧ツイッター）の文章を見ると、どこか先生はこの旅を楽しんでいるようにも見えた。私はこのことから、ワクワクを意識することは人生を面白くしてくれる重要なことだと考える。溝口先生の授業では、ワクワクグラフがたびたび登場した。このワクワクはあくまで学問に対してのワクワクである。しかし、何かハプニングが起きた時でさえも、そのハプニングを楽しむように何か学べることを探す心のあり方が大切だと感じた。私もそのような心持ちでありたいと切に望む。

私が先生らのウルトラ横断の旅を拝見できたのは、インドネシアが水路・道路・農地などの農業基盤だけでなく、情報インフラ整備も進めているためだ。このように、情報インフラが農業における利活用だけでなく、単に通信機能として生活面でも大いに活躍している。一方で、日本ではどうだろうか。日本の農林水産省は主に農業機械の自動運転技術などを重んじている。情報インフラの話は今まで耳にしたことがなく、先生から初めてお聞きした。私は日本の農業が今後発展していくためには、情報インフラの整備が必要だと考える。単に情報インフラを整備することによって、そこに若者が移住し、農林水産省が掲げている農村振興も達成することが可能ではないかだろうか。

２.「農業農村工学の「つなぐ・つながる」を考える」を読んで考えたこと・質問

この行間を読んで考えたことは、『1.「情報通信インフラ整備で開花する新しい農業農村の多面的機能」を読んで考えたこと』より、やはり農村地域には早急に通信環境を整えることが第一である。また、溝口先生は「田舎に高速通信インフラが導入されれば、都会の常識では思いもつかぬ農業農村の多面的機能が発見される可能性がある。」という主張である。そこで私は一つ疑問が生じた。何十年、何百年後の話かもしれないが、田舎で通信環境が整えられ、そこへ新たに人々は移り住む。人は住む環境を整えるために、農村は小さな都市へと発展していく。しかし、そこに現在は農業農村の多面的機能として、農村の景観を保全する役割と癒しや安らぎをもたらす役割があるが、果たしてそこに見る影はあるのだろうか。空論のそのまた空論を考えるのは野暮かもしれないが、どうしても気になったので溝口先生にこのことをお聞きしたい。